

家系

大村伸一

今日、私は死ぬだろう。あるいは明日かもしれない。遅くとも明後日の朝には死体となっているはずだ。

老衰を感じているわけでも病の痛みがあるわけでもない。誰かに命を狙われるとか、まして自ら命を絶つ計画があるのでもない。それでも、この身に訪れる死は数学の計算結果のように確実なものだと分かっている。

子供の頃の記憶は薄れていてもうはっきりと思い出すこともできないが、今とは随分違った世界で生まれた。人はみな自分の足で歩き、道具は木で作られていた。人が一生かかって旅することのできる世界はまだ狭く、世界の果てはまだ音よりも遠くには存在しないようだった。

三十歳を幾つか過ぎてから伴侶を得、息子を二人と娘を一人育てることができた。世界を旅する仕事だったがいつも家族がそばにいた。陸は荷車を牛にひかせて進み、海を渡るには大きなエイの背中にテントを張り海に落とされないようにお互いの体をロープで結んだ。嵐が来れば岩の奥に隠れ竜巻は遠く迂回して進んだ。やがて二人の息子は逞しく育ち、一人娘は無口だった。私たちは微笑むことも笑うことも知っていた。

◎

ある町で一ヶ月ほど仕事をし町を離れるという前夜、下の息子が自分はこの町に残ると言った。その決意を妻も他の子供達も既に知っていたようで、私がどのような反応を見せるのかをそれとなく伺っているような気配があった。私の問いかけにもいちいち彼の味方をするような言葉を選んでいった。

町で知り合った娘は働き者で丈夫な体をしていてとても陽気だった。その娘と一緒にいるのだという。私は出発を一週間遅らせて二人を祝福した。

それまでも子供達が離れてゆく日を想像しないではなかったが、その時がそんな風に不意に訪れるとは思ってもいなかった。二人のこれからを案じつつ私たちは旅を続けた。

息子から毎月決まって届く手紙には町での生活が綴られていて、私も妻も子供達もそれを読んでは笑い涙し心配したものだ。下の息子はまだ私たちと共に旅を続けていた。

私たちと同じように仕事で旅を続ける家族は多い。一人で旅をしている者も見かけるが、彼らは自分の素性をあまり話そうとしない。たまに自分の生い立ちを面白おかしく聞かせる者もいて、娘や子供達を夢中にさせる。勿論それは全部作り話なのだが若い者には空想も必要なのだから、誰も話の邪魔はしなかった。そんな男の一人と旅をするのだと娘は小さな声で言った。私は賛成したくはなかったのだが妻と長男に押し切られてしまった。だがそれでよかったのだ。九十二年後死を看取る私に自分の人生は偽ることなく幸福だったと娘は打ち明けてくれた。

旅は三人になってしまったが、息子や娘からの便りは途絶えることがなく、私たちはいつも一緒だった。そして、娘が旅立って後、二十年間長男はいつも私たち夫婦と共にあり、力を尽くして支えてくれた。二十年目のある日、彼もまた家族を持ったが、両親に対する気遣いは絶やさなかった。

初めての孫は双子だった。生まれて二ヶ月後にその笑顔を見た。二十年後には、その孫に子供が生まれ、その頃にはもう他の孫の孫が多勢いた。時々、子供達の名前や住処が分からなくなるので地図に彼らの名前を書いてみたりするのだが、そのたびに世界の広い範囲に自分の家族が住んでいることを発見し驚くのがあった。八十歳を越えた頃には妻はもう記憶が壊れ始めていて、家系図の間違いをを見つける役にはたたなかった。

長男の家族は私と妻の馬車から一日ほどの距離をとって移動していた。同じ仕事を継ぎはしたが、長男が家族を持ったとき、同じテントで暮らすまでもないと妻が提案したのがあった。その妻が息を引き取ってから、長男と私は一日の距離をおいて旅を仕事を続けた。亡くなった妻に義理立てしていたわけではないが、もう一度妻を持つとは思わなかった。何も不便なことはなかったし、夫婦というものはもう十分やり終えたと感じていた。長男の妻が死んだ時、彼もまた同じように感じていたようで、最期まで新しい女に目を奪われることもなかったようだった。長男の息子もまた、独立してから父親と同じように、彼の父と一日の距離を置いて旅を続けるようになっていた。一日おきに続く一族の旅の列は、おそらく大陸の半分の長さにまでなっていたのではないだろうか。

◎

次男の村を竜巻が襲い、村が潰滅したという知らせを受けて、私は慌てて彼の村に向かった。あの頃には、次男にも四世代ほどの子供達がいたはずだった。麦やカボチャなどの畑をつくり、増える家族に合わせるように開墾していったので、次男一族の耕作地は地平線の遥か彼

方まで続いていた。それが大竜巻によって根こそぎにされ、子供達とその家族の命が一瞬で奪われてしまった。

その時間、家を離れ町に買い出しに行っていた次男は命拾いしたが、次男のあれほど気力を無くした顔を見たことはなかった。自分の一族のモノクロ写真を床に隙間なく並べ、涙をその上にこぼしながら一つ一つを丹念に眺め、その間ずっとなにかをつぶやいていた。竜巻の来た日から、もう一週間が過ぎていたというのに。

その次の朝、次男は気力とともに身体中の水分を失ったかのように乾き切った体をして死んでいた。それまでの激しい嘆きを見ていれば、仕方のないことだとさえ思えたが、私は体の中心に穴が空いたかのような虚しさを覚え、床に座り込んでしまった。私や遠くから駆けつけた孫たちで、次男の身体を移動させようと骸に触れた時、あまりにも乾いていたためか、触れた部分から次々と身体が粉になり微かな空気の動きにも飛ばされ室内は小麦粉を吹き飛ばしたように次男の身体が充満して、しばらくは向こうが見えないほどになった。そのとき誰かが外から帰って来てドアを開いたため、粒子となった次男はドアを抜け、屋外へと流れ出した。慌ててドアを閉めさせたが、家の外に流れ出した次男の身体は風に流され、空に届くほど大きく広がっていた。彼の開墾した土地の上を覆いさらにその先まで行かせてやりたいという思いが起きて、私は今閉じたばかりのドアをもう一度開くように命じ、家の窓をすべて開放するようにとも言った。次男の姿は雲のようにも見えたが、雲とは違い少しも千切れることなく、大きな半透明のひと塊りの雲となって、大陸の空を覆っていった。次男は三日後には大陸の反対側にまで達した。やがて細かい雨が降り始め、それは半年の間降り続けた。

雨の降る中、私は、長男の子供達とともに、亡くなった者すべての骸を探し墓を作った。ほとんどすべての骸は私の子孫であり、泣きながら壊れた人形のようにぼろぼろになった体を集めた。どの顔もどの顔も私たちはみんな知っていた。もしも雨が降っていなければ、私たちの涙はすぐに涸れてしまっていただろう。全員の子孫を立ててからも、私たちの悲しみは終わることがなかった。雨に打たれながら墓の前で祈り続けた。

半年後、雨が降りやむと次男は空から消えた。おそらく次男が空から消えたために雨がやんだのだろうが、息子が開墾した土地にはもう二度と雨は降らなかった。

私たちの悲しみは消えることはなかったが、それは半年の間に私たちの心の中心にまで馴染んでいたもので、元の生活を続けても大丈夫だろうと思えた。あれの母親が先に死んでいて、悲しい思いをさせずにすんだことが、私には救いだと思えた。

自動車が道を走り始めるとたちまち地表は黄色から灰色に変わりそれから火を放ったように黒く変色した。好色な哺乳類の一種である車は見境なく繁殖し地表を埋めた。ひとつひとつの車は世界の表面を駆け回り地表を走る蛙や犬を始めとしてカモシカやクマやポプラの木や人を正確に効率よく殺戮するための効率も向上していった。それとともに、私たちを運ぶものも牛から、馬に、そしてやがてトラックに変わった。長男の息子、そのまた息子、そしてその息子という具合に、それぞれ六時間ほどの距離を置いて縦列を形成し、手紙に変わって無線機の扱いに上達していった。一人娘の嫁いだ一族は私とは違い早い時期から車を利用し、大陸に散らばる大きな都市を中心に仕事の舞台を作り上げていて、それはそれで競争は激しいようだったが、大きな利益もあげていた。

あの頃は、どの町に行っても必ず私の血縁者がいて、一日の仕事を終え町のはずれの安宿を取ろうと考え、こちらから連絡をとってはいないのにいつも迎えがやって来て自分の家に来てくれと抱きしめて迎えてくれたものだ。いつの頃か、大陸の端に小さな村がありその村では仕事がほとんどないのだが月に一度は必ず訪れることにしていた。畑で見事な芋やトマトを作り続けている男がいて、彼は私の娘から辿って何代目になるのか分からないが遠い孫の一人だった。娘の連れ添いの広い額がそっくりで、笑顔には娘の面影があった。勿論、男も血の繋がっていることは知っていて、行けば必ず喜んで迎えてくれ私の大好物の肉麵を出す。不思議と気の合う男だったが、彼は若い頃性悪な女にひどく騙されてそれ以来、愛する相手を見つけれないでいた。家の前の小さな庭に運び出したテーブルで一緒に酒を飲んでいると、見かけた村の人たちも集まって一緒に酒盛りとなる。この村にはその男以外に血族はいなかったの、みんなが私を彼の息子だと思っていた。私は四十代くらいにしか見えないというが、孫はもう七十過ぎの年相応の外見だったからだ。一族は揃って長命で若く見え、この孫のように老いる者は少ない。村人たちからそう見られていることを承知で、彼は私を「じいちゃん」と呼んだ。誰もそれを本気にはしなかったが、彼が何故そんな冗談を言うのかも分かってはいなかっただろう。

彼が八十二歳になった秋に連絡がありもう二三日の命だと言う。あわててその村に向かったが到着するまでのまる一日の間、不安で仕方がなかった。しかし、家の前に出されたテーブルにつきうつむいていた彼が、私に気づいて頭をあげにっこりと笑ったとき、あの連絡は間違っていたことに気づきほっとした。彼に近づくと彼は何か言っているのにその声が聞こえない。年老いて染みだらけの顔と髪が抜け落ち禿げた頭の中に光る黒い目は子供のように輝いていて私が返事をしてくれるのを待っている。しかし、テーブルの横にたどり着いても声は聞こえない。身をかがめその口元に耳をよせると、彼がかすれた声でおじいちゃんと言っているのが聞こえた。なんだと返事をする、彼の姿は消えてしまった。

あわてて家の中に駆け込むとそこには村人たちが集まり、彼の死を見守っていた。扉をあけ

て入ってきた私に彼らは道をあけてくれた。その向こうには横たわる彼の姿があった。それはさっきテーブルにいた彼と同じだった。年老いて染みだらけの顔と髪が抜け落ち禿げた頭。目は閉じられていた。

村の友人たちは何も言わなかった。この村では死は悲しいことではない。人は成長し老い死ぬというだけのことだ。だが、友人たちはみな目を隠していた。私はそれをありがたいと思った。

やがて娘やその子供たちが集まり、長男とその一族もやってきた。この村に一族のすべてが集まることは無理だった。軀は海岸で焼き灰は海に還された。灰は海岸の波の色を白く変えた。白い色は村のある入り江の水を変えそれから外海に広がり、海流を伝いどこまでも海を白く変えていった。水平線の向こうまで白く変わるのに二時間もかからなかった。世界の地球儀の海が青から白に塗り替えられるのに一年もかからなかった。

娘もまた月に一度は彼に会いにきていたらしい。不幸な人生のようにみえて実は幸福だったのだと誰もが知っていた。

◎

この人生の間に戦争は幾度となくあったが、世界に散らばり住んでいる私の一族は決してお互いに殺し合うことはなかった。五百年前のあの世界大戦の時でさえも。

あの戦争では、世界のどこに住んでいようと一キロを走り続けられる体力さえあれば軍隊に招聘され戦うことを命じられた。

あのとき生きていた私や私の子孫達は子供を除いて、ほとんどが兵士になることを命じられた。書類に残された一族の男達の年齢はとっくに徴兵の限度を超えていたのだが、一族の者はみな見た目が若かったので、家を訪れた徴兵士官の命令で即座に軍に連れて行かれたのだ。家を持たない者達は徴兵を逃れることができたが、地上のすべてが戦場になったあの時期、砲弾に碎かれる者に兵士と民間人の区別などなかった。

その命令に従えば、否応なく私の一族は、家族同士で殺し合わなければならなくなる。それは逃れようのない運命にも思えた。勿論、私の一族でそれを受け入れられる者など一人もない。私と私の子供達には、兵士となることを拒む事しかできなかった。家族で殺しあう事を拒み、人を殺すことを拒み、そして反逆の罪で軍刑務所に収監され、多くが処刑された。敵に殺される事を拒否すれば、味方に殺されてしまうということなのだろうか。十年に及んだ戦争が終わった時、私の子供達の多くがそんなふうに命を失っていた。

国家の威信を誇りに思うものはほとんど残らず、資源も産業も破壊され、その後、経済が復興するのに百年以上もかかったあの戦争で、戦いを拒んだために死んだ子供達も多かったのだ

が、戦後、息子も娘もすべて失い、それで生きる気力さえ失ったのだろう、後を追うように死んでいった者の数も少なくなかった。

あの戦争の間、私と私の一族の者たちは、軍による幾度も制裁や処罰を受けた。私と同じ収容所に投獄された十五名の子供達の中には、過酷な処罰に耐え、腕が肘より先の部分で奇妙な角度に曲がってしまったコックと、顎が歪んで目と違う向きにしか口を開けなくなった機関士と、失明させられただけでなく、心が壊されて意味の分からない事しか話さなくなった菓子職人がいた。それでも、彼らが生き延びたのは子供達がいたからだ、私には分かる。子供達のために、彼らは生き続けなくてはならない。家族を守る事以上に生きる理由などあるだろうか。

戦争が始まった頃に生まれ、ろくな食事もできずに貧弱な体に育った少年たちが、戦争の末期には徴兵され、銃も持たされず戦場に送られた。子供達は、敵の機械兵器の前面に立つように命じられ、おもちゃのようになぎ倒された。私の一族の子供達もその中にたくさんいたのだ。大人たちと違い、子供は生き延びる事ができなかった。

戦争で死んだ私の子孫の一人一人を私は覚えている。私にはそれくらいの事しかできなかった。戦争が終わって何十年も、子供を失った親たちの死は続いた。命の鎖で繋がれた私の子供達が、戦争という悪魔に力づくで地獄に引きずりこまれて行くように思えた。私は一人一人の思い出を込めて、名前を与え続けた。

それでもまだ、世界には私の一族は千人以上いた。

◎

世界大戦が終わり数年しても一向に景気はよくなり、商売を再開しようにも車の一台も買えない生活だった。初めの頃のように牛でもかまわなかったが、牛は食料にもなるのでかえって手に入りにくい時期だった。手を尽くして廃棄車両を何台も集めて動く部品を取り出し組み立てて動く車を作り上げたのは戦後十年以上経った頃だった。それでようやく仕事を再開できるかと、大陸のあちこちにいた顧客を改めて訪問してみると、半分くらいは戦争とその後の混乱で死んでしまっていたことが分かった。それでも久しぶりに顔を合わせれば戦前の楽しかった頃や戦時中の苦しかった思い出を話すだけで再びつながりを取り戻すことができたように思えた。金にならないような仕事ばかりだったがこの先に繋がるはずだと信じて新しい仕事の依頼を受け町から町、村から村をまわった。家にいた頃は知らなかったが、こうして大陸を回ってみると、戦後からずっと大勢の人々が行方不明になっていることが分かった。不意にいなくなり、まったく連絡がとれなくなる。金や何か目的があつての誘拐というのではないらしい。戦後ずっと続いている混乱の中で、自ら命を断つ者や人身売買の

餌食となった者もいるだろうが、真相は何も分からない。お客の元を離れるとき、彼らは決まって子供や連れ添いを見かけたら連絡が欲しいと言った。

私の一族にも失踪者は多く、戦前妻と一緒に作った名簿に手を入れ、死んだ者は赤で、失踪者は青い線で消していたのだが、大陸を横断し終える頃には紙は真っ青に塗りつぶされていた。残された者は百名にも満たなかった。

何か世界的な人身売買組織がこの国の人間をとらえ奴隷として海の向こうにある島国で売っていて、それがとんでもないほど金になるのだという噂があった。その島国は海に隔てられていたため世界大戦にも加わらず、戦後、荒廃したこの大陸で参戦した国々を餌食にするように経済発展を遂げたのだという。そんな島国があるわけではない。世界大戦に加わらなかった国などどこにもないはずだった。

こういう噂もあった。軍はまだ戦争の集結を信じておらず次の決戦に向けて無敵の兵士による不死軍団を作ろうとしている。それが単なる噂ではない証拠には、すでに二十の不死師団が結成され、彼らは地下で日夜訓練を重ね、いつ戦火が開かれようと万全の体制にあるのだという。そして、その兵士となる者が行方不明になった人たちなのだと言はう。拉致された者たちは精神的肉体的に改造を施され、言葉の意味の通り不死となり、恐れを知らぬ兵士に変えられている。そんなことがあるだろうか。あの世界大戦が勝者のない集結を迎えたとき、世界のすべての国は軍隊を放棄し経済的な復興だけを目指すのだという話ではなかっただろうか。

どの噂も簡単にその嘘が見抜けたが、それでもなにがしかの真実を伝えていたのかもしれない。

私の生まれた村はあの戦争ですでに破壊されその場所には新しい町が建築されていた。町並みは村の面影などまったくなかったが、破壊され崩れてはいても山の輪郭を見れば元の姿を思い出せし、海の色や水平線でつながる空の光は何一つ変わっていないように思えた。人を破壊したければまず海を破壊しなくてはならないのだろう。その新しい町では私の仕事は見つからなかった。知り合いのいないことも理由だが、私の町に対する気持ちがどこか頑なだったのかもしれない。誰とも話をしたくなかったので町からはそうそうに退散し、懐かしい光景の残っている海岸に車を止め、しばらく海を眺め、そのまま町を離れようと考えていた。

「君が始祖だね」

私の車の後に止めた車から降りて私にそう声をかけてきたのは灰色の服を着た男だった。どこかで会ったことがあるのかどうかは思い出せなかった。男は穏やかな顔つきでこれといった印象もなくもしも町で出会っていたとしても気づかなかっただろうし、ここで別れればすぐに忘れてしまうだろう。そんな気がした。それに、私には「始祖」という言葉の意味が分

からなかった。もしかすると男は私のことをよく知っているのかもしれない。

「君の子供達のことをよく知っているよ。だから、君には初めて会ったという気がしない」男は車から離れ私のほうに近づいて来たが、男のおしゃれな靴は砂浜に潜り込み、なかなか前に進めないようだった。子供達というのは私の今ではほとんど失われてしまった子孫達の事かもしれない。だとすれば、「始祖」というのは私のことなのだろう。しかし、こんな男のことを家族の誰からも聞いたことはなかった。勿論、こんなに印象の薄い男のことをことさら私に報告する理由などないのだし、もしも話を聞いていたとしてもそれがこの男だと気づくことができないだけかもしれない。どこで子供達に会ったのだと尋ねると男は少しうれしそうに答えた。

「ふむ。あちこちで会いましたよ。そう。最初は」と言っで世界大戦のときの激戦地の名前を言い「でしたね。あなたのお子さん達はとても勇敢だった。どんなに危険な場所へも命令されればすぐに向かっていった」

それは嘘に違いなかった。私の子供達は決して戦闘に加わるようなことはない。私がそう指摘すると男は、昔のことを思い出すため目を閉じてしばらくしてから話し続けた。

「確かに、戦争のとき、お子さん達は決して戦わなかった。そうですそうです。それで、仕方なく処罰が命じられた。あなたも処罰された一人でしたね。記録は拝見しました。あの頃は不思議でなりませんでした。どれだけ厳しい処置を受けても、あなたのお子さん達だけは死ななかつた。一緒に処罰された何百人かの若者は、いとも容易く壊れてしまったのに。あれは不思議でした」

するとこの男は軍の人間なのだ。戦争の間敵と戦うことを拒んだ私と同じように多くの子供達が、私と同じように処罰された。男の言うようにその処罰で死んだ者はほとんどいなかった。戦後、そのことを知って、私はただ喜んだだけだったが、同じ処罰を受けてそんなに多くの若者が死んでいたとは知らなかった。しかしすると、男が話した私の勇敢な子供達とは何のことなのだろうか。

男は靴を脱いで裸足になり、手にぶらさげた靴の中の砂を砂浜に掻き出すことに夢中で、それ以上話そうとしなかったが、それが一段落するところ続けた。

「今では、私はお子さん達と一緒に働いてるのです」そして男は私の遠い孫たちの名前をあげた。それは行方不明になった者の名前だった。「とても優秀な兵士です」するとあの子達はこの男のところにいるのだろうか。

彼らに会いたいかと男は尋ねた。靴の中の砂は全部取り除くことはできなかつたらしくぎこちなく歩く男の後に私はついて行った。

地下深くに建設された巨大なトンネルの中はまぶしいほどの光にあふれ、気をつけなければ天井に映し出されている青空の映像を本当の空だと思い込んでしまうだろう。車のまま地下

深くに運ばれ、砂漠の光景を映された壁の間を走り、やがて兵舎のある一角にたどり着いた。大陸のあちこちに旅をした私だが、その周囲に映し出された映像の土地は知らなかった。地上にそんな場所があるのかどうかも分からない。兵舎のずいぶん手前に車を止めると男は無線機を取り出し誰かに何かを命じたのが分かった。それからしばらくして、兵舎から五人の兵士が歩いてくるのが見えた。行軍するときと同じように硬直した手足を五人揃って動かし一列になってやってきた。そして、男と私から数歩離れたところで機械のように向きを変え横隊止まれ。直立の姿勢を崩さずに命令を待っていた。

「ご対面です」

男がそう言うのでよく見ると、土に汚れた顔には見覚えがあった。ただ、五人とも私を見ても少しも表情を変えなかったのも、もしかすると私が見間違えているのではないだろうかと思った。

「最後に会ったのは七年前くらいですね」

男はそう言って彼らに休むように命じ、兵士達はその場に立ったまま体の緊張を解いた。それでも、私を思い出した様子はなかった。男は彼らが昔のことを何一つ覚えていないことや、今では軍の中でも最も優秀な兵士であることを誇らしそうに私に説明した。私は少しも嬉しくはなかった。五人の名前を一人ずつ呼びかけてみたが、まったく反応を示さなかった。

「それは無駄です。本当の兵士というものは上官の命令しか聞こえません」

そして私の首筋に薬物を注射した。私の記憶はそこでなくなった。

◎

次に目覚めると私は兵士に変わっていた。男は大佐でありこの軍の中で最高位の指揮官だった。直属の士官以外は大佐を将軍と呼んでいた。私も将軍と呼ぶようになった。

将軍の言葉の通り私達は不死身だった。銃で撃たれても剣で貫かれても痛みは感じて命を失う事はなかった。子供の頃からずっとそうだったので私は自分のその体質を当たり前だと思っていたが、他の兵士達が同じ目にあっても容易く死んで行くのを見て、自分達が特別であることを知った。

戦争はすでに終わったと思っていたが、そうではなかった。十年も経って少しも経済が回復しなかったのは秘密の軍隊が維持され、それだけでなく戦闘が続けられていたからだった。大陸の地下にはおびただしい数の師団が組織されていて、この国にどれだけの規模の軍が存在するのかは機密だった。数ヶ月をかけて計画された作戦が実行される時、兵士は密かに命令を受け兵舎から姿を消す。彼らは戻ってくるものもあれば別の兵舎に移動になり戻らな

いものもいた。私と私の子供達のいた部隊は人員が欠ける事はなく幾度もの作戦の後いつも顔を合わせることができた。

私は記憶を失ってはいなかった。私の子供達も本当は記憶を失ってはいなかった。ただ、殺人に対する禁避がなくなっていたのは確かだった。私たちは敵を殺戮することを楽しみにさえした。ただ、幾度もの戦闘で敵の顔や姿を見た事は一度もない。命じられるまま、命じられる場所を狙い、銃弾や砲弾やその他の兵器を使用した。建物や車両や時には山や海が破壊される様子を見ることはあったが、死体を見た事はなかった。私たちが何と戦っているのか、あの頃、私は少しも不思議に思わなかった。命令を完全に遂行することが、最高の喜びだった。

私たちは不死身だったが、年に何度か命を失う者がいた。それまで幾度となく加えられた殺傷行為が、いつもは命に当たらない「はずれ」なのだけれど、たまに「当たり」になる理由もなにも偶然としか思えない「死」が訪れた。兵士であった日々、私と私の子供達が目にした「死」は一族の誰かがそのようにして命を失う場面だけだった。あれは本当に戦争だったのだろうか。

「死」は突然やってくるようにも見えたが、何人かがそんなふうにして死んでいった後、彼らはその死のしばらく前から決まって急に老いていたことを私たちは思い出した。一族はみな実際の年齢よりもはるかに若く見える。私ですらあの頃まだ四十代にしか見えなかった。それが死を迎えた子供達は、数日の間に急に老化が進み、肌は皺だらけになり頭髪は抜け落ちるか白髪に変わった。筋肉も落ちて動きが鈍くなり、そして死んでしまう。それが「不死」を失う予兆なのだろうか。たぶんそうだったのだろう。私たちはその予想を一族以外の誰にも話さなかった。上官にも報告はしなかった。

戦争には終わりが無いように思えた。地下の軍で生活を続け戦闘を続け二十年が過ぎた。私は士官になることはなかった。不死身の者は前線で働かなくてはならないのだろう。その間に、私の子供達は少しずつ消えていった。戦闘で死んだのか、他の部隊に移動になったのか、はっきりしたことは分からなかった。地上では戦争が終わりすでに三十年が経っていたが復興の兆しはまったくなく物は欠乏しあまりにも物の値段が高くなってしまったので、金の意味が分からなくなり、ただ現物だけが力を持っていた。この三十年間軍隊などないことになっていたが、この国で一番力を持っていたのは軍隊だろう。補給基地を強襲する作戦が次第に増え、作戦はいつも成功した。作戦の後、軍の補給部隊は過剰な物資であふれた。物資は軍の資産簿に記録される前に半分になり、その消えた物資が闇市に出現した。十年の間、次第に補給基地強襲作戦の頻度が高くなり、これでは軍隊ではなく海賊ではないかと兵士達の間ではささやかれることになる。

いずれにせよ、補給を失い続けた敵の軍事力は弱体化し、補給基地を守るために過剰に配備された戦闘部隊は自分達の補給資材を食いつぶし、こちらが何もしなくても、敵の軍隊は自滅していくのだと、将軍は大陸各地の地下基地をめぐり兵士達にそう語っていた。そしてその戦略は正しかったのだろう。戦闘はいつも我々の勝利で終わり、敵の戦闘部隊は我々から逃げ回っているように思えた。その頃はそうとしか考えられなかったのだが、しかし、今から思えば敵は反撃のチャンスを探っていたのだ。

反撃の矛先は他にもない我々の基地だった。地下基地への襲撃はそれが初めてであり、対応は何ひとつ間に合わず我々は壊滅した。部隊の中で不死身の私の一族だけが生き残った。生き残りはしたが、あらかじめ計画されていたように私たちはまず腕と脚を粉々に破壊され、何ひとつ反抗できないようにされた。敵は我々不死者の存在を知っていたらしい。

強襲を受けたのは我々の基地だけではなかったらしい。我が軍のほとんどの基地が襲撃され解体された。勝利を信じていた我が軍は敗北し、将軍もまた、捕えられた。

そのようにして、本当に戦争は終わった。

私の一族はこの大陸の軍だけでなく、敵の軍にも従軍していた。私たちは血の繋がった者同士で殺しあっただろうか。それがずっと気がかりだった。誰も本当のことは教えてくれなかった。誰にも分かりはしなかったのだろう。戦争は物事をあまりにも複雑にしてしまう。真実などどこにもなかったのだ。

はっきりしていたのは、誰がやったのにしろ、私の一族はもう誰も残っていないということだった。四肢を義足と義肢に変え自分の家に戻った時、一週間前に長男が死んだことを教えられた。息子と共に働いていた人たちが立派な葬儀をあげてくれ、家族の墓に埋葬してくれていた。長男が、私を除く一族の最後の一人だったのだろう。私は体の中から大切なものが抜け落ちたような気がした。もう家族は誰一人いなかった。初めの時に戻っただけなのだとも思ったが、もう一度始めようという気持ちはなかった。

三日もすると私の肌は乾き始め、筋肉や体内の脂肪が血と共に尿や便に混じって排泄されるようになった。鏡の中の男は皺だらけで、いずれ老衰したらそうなるだろうと想像したよりも痩せて濁った目をきよろきよろさせていた。とはいえ、自分の想像していた姿をそれほどはっきり思い出せるわけでもなく、それが自分だということすら、次第に分からなくなっていた。

今日、私は死ぬだろう。あるいは明日かもしれない。遅くとも明後日の朝には死体となっているはずだ。つい一週間前までは若く命に満ちていたのに、今では老衰し身体中の関節が力を失い力を生まなくなっていた。体を無理やり動かせば、衰弱した筋肉や腱が痛んだ。もう死をとどめることはできない。この身に訪れる死は数学の計算結果のように確実なものだと分かっている。

私から始まった物語はこのように終わる。